

中世アイスランド研究の魅力

松本涼（日本学術振興会）

「財産は滅び、身内の者は死にたえ、自分もやがては死ぬ。だが、決して滅びぬものをわしは一つ知っている。死者すべてをめぐって取沙汰される評判だ」

（「オージンの箴言」77節）

❖ **サクソ・グラマティクス**（Den.1150-1220頃）：アイスランド人＝優れた物語の語り手＋詩人

「トゥーレ〔アイスランド〕の人々の活動もみのがすわけにはまいりません。彼らは、土地が元来不毛のため食べ物の贅沢はできず、たえず節度をまもって務めをはたし、外国人の事績の記録を完成するためにすべての時間をつかっているため、その貧しさを天性の豊かさで埋めあわせているわけです。実際彼らはすべての国民の歴史を知り、記録することを楽しみにしており、他国民の英雄的行為を記述することを自国のそれと同じように名誉と心得ているのですから。」

（谷口幸男訳『デンマーク人の事績』5頁）

❖ 「ソルギルス・スカルジのサガ」

（ソルギルスという若者が敵に捕らえられ、眠れない一夜を過ごす。仲間のソールズは、何故そんなに意気消沈しているのかと尋ねる。）

「考えていたんだ」ソルギルスはいった。「もし俺の命が尽きる前に、俺についてのサガが語られなかったら最悪だな、と。そうしたら俺は、今受けているこの不名誉にまったく復讐ができないことになる。」

ソールズは答えた。「そんなことを考えるのはやめておけ。もし生きながらえたら、自分が正しいと思うことをすればいい。だがもしここで死ぬことになったとしても、その方がいいんじゃないか？ もうそれ以上考える必要がないのだから。」

「死ぬのは怖くない」ソルギルスはいった。

（*Þorgils saga skarða*, in *Sturlunga Saga II*. Reykjavík, 1946. ch.17, p.215. 拙訳）

→ サガに語り継がれること = 不滅の名誉 ⇔ 物質の乏しさ

❖ レイキャホーラルの結婚の宴（1119年）

「その宴会ではあらゆる娯楽――ダンスやグリーム〔レスリング〕、サガの語り人が人々を楽しませていた。…略… そこでは、今では多くの人々が反論し、知らない振りをするような話も語られた。そのような話は真実ではなく、作り話がまるで真実かのように語られているだけだと今では考えられているからである。スカルマルネスのフロールヴは、ヴァイキングのフロングヴィズについてのサガ、リズの人々の王オラーヴィのサガ、塚破りのベルセルク・スラーインのサガ、そしてフロームンド・グリプソンについてのサガを、多くの詩をまじえながら語った。これらのサガをスヴェッレ王〔ノルウェー、在位 1184-1202〕は楽しみ、そのような嘘のサガが一番おもしろいと評した。しかし人々は、彼ら自身の家系がフロームンド・グリプソンに由来することを知っていた。そのサガはフロールヴ自身が編纂したものである。その後、司祭インギムンドが、バルエイのスカールド詩人オルムのサガを語り、多くの詩も引用した。そしてサガの終わりには、インギムンド自身が作った短詩を詠んだ。そして、多くの学識ある者たちは、そのサガを真実とみなした。」

（「ソルギルスとハヴリジのサガ」1240年頃成立、『ストゥルルンガ・サガ』の一篇）

→ サガの語り手（複数） → 編纂者／「嘘のサガ」lygi-sögr

❖ 「語り手のソルステインの小話」：王の事績を、アイスランドの全島集会で聞き習う

* 環境と物語 — 「絶海の孤島」の文学



成蹊大学文学部学会 『探究するファンタジー：神話からメアリー・ポピンズまで』 (東京: 風間書房, 2010).